



現地で宗教者に遺骨の状況を語る具志堅氏(中央)

戦没者遺骨含む土砂 辺野古建設で投入

沖縄内外の宗教者、反対声明

辺野古新基地建設のために土砂の投入作業が行われている沖縄県で、昨年、土砂の採取地として沖縄南部が追加された。同地域には太平洋戦争の沖縄戦で犠牲となった人々の遺骨がいまだに残っており、「辺野古に新基地を造らせない島ぐるみ宗教者の会」「平和をつくり出す宗教者ネット」など6団体が呼び掛け、昨年12月、共同声明を発表した。

声明にはカトリック那覇教区のウェイン・バー

ント司教ら県内外の宗教者362人が賛同している。声明は「戦没者の遺骨が含まれている土砂を戦争のための基地建設に使用してはなりません。これは、戦没者を二度殺すことと同じなのです」と訴え、土砂使用計画の撤回と沖縄戦犠牲者遺族への謝罪を菅義偉首相に求めている。

同月22日に那覇市の沖縄県庁記者クラブで記者会見を開き、その後、玉城デニー・沖縄県知事へ防衛省の設計変更を承認しないことなどを求める要請書を提出した。

翌23日には埋め立て工事の土砂採取地とされる糸満市米須の「魂魄の塔」近くの採取地前へ赴き、「沖縄戦犠牲者諸宗教合同慰霊式」を挙行。その後、遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」の具志堅隆松代表の案内で現地を視察した。

具志堅氏は沖縄戦遺骨収集ボランティア活動を38年間にわたり継続してきた。「遺骨収集をしなればならない場所が遺骨と共に消失してしまふ。戦争で殺された人の骨を新たな戦争のための基地建設に使用するのは戦没者への冒瀆だ。死者は崇敬の念をもって対応されるべきだ」と訴えている。

翌23日には埋め立て工事の土砂採取地とされる